

くろねこちゃんとベージュねこちゃん

作 谷賢一

登場人物

佐藤よし子。旧姓、鈴木。

佐藤けん太。よし子とゆき男の息子。第一子。

佐藤まち子。けん太の妻。

佐藤とも美。よし子とゆき男の娘。第二子。

佐藤ゆき男。よし子の夫。

高梨。最近雇われた、お手伝いさん。

茶ねこ。

黒ねこ。

舞台

母よし子の暮らす、関東地方の一軒家、そのリビングルーム。

著作権・上演権

本作品の著作権および上演権は、著者である谷賢一に帰属する。

谷賢一

ken@playnote.net

<http://www.playnote.net>

黒ねこ「こんばんは、猫です。本日は、DULL COLORED POP 第十一回公演『くろねこちゃんとベージュねこちゃん』にご来場頂きまして、誠にありがとうございます。開演に先立ちまして、お客様に、猫から、お願いがございます。携帯電話、PHS、時計のアラームなど、音の出る電子機器は予め電源をお切り下さい。上演時間は約百分を予定しております。

上演中は演出の都合上、非常誘導灯を消灯させて頂きます。非常時には係員が誘導致しますので、お席から立たずにその場でお待ち下さいませ。

また、上演中、演出の都合上、煙草を吸うシーンがございます。劇中で使用される煙草は、匂いの少ない低臭気タバコとして近年人気を集めているD SPECシリーズですが、万が一ご気分の悪くなったお客様がいらっしゃいましたら、大変申し訳ありません。また、上演中、演出の都合上、舞台上で飲食をするシーンがございます。どれも真心込めておいしく調理されており、いい匂いがすると思いますが、ご気分の悪くなったお客様がいらっしゃいましたら、大変申し訳ありません。

また、上演中、演出の都合上、どうしても猫には見えない俳優が、猫を演じる場合がございます。かなり無理しても猫には見えない場合もあるかと予想されますが、何卒ですね、豊かな想像力を発揮して頂いて、見えない猫をご覧下さいませ。にゃん！」

そして演劇が始まる。

一場すなわち、プロローグ

よし子「あたし生まれ変わるんなら猫がいいわ。一日中あったかい日なたでぐっすり眠って。お散歩して。爪といで。猫の仕事って何かしらね。ないでしょう？ ないわね。いわね、あんたたち気楽で。人間は嫌。本当に面倒」

黒ねこ「こう見えて、猫も結構大変なんだぜ。なあ」

茶ねこ「うん」

よし子「あらそつ」

黒ねこ「猫はさあ、引きが良くなかつちゃ、生きてけないんだ。ラック一発勝負、みたいなところあってね」

よし子「あんたたちお茶飲む？」

茶ねこ・黒ねこ「結構です」

よし子「淹れたげる」

そしてよし子は三人分のお茶をいれる。

黒ねこ「この辺は猫に優しい人が多いからまだマシだけど、それでもエサ場の確保は早いもん勝ちだろ。誰も助けちゃくれない。猫として生きるってのは、孤独とうまく付き合うつてことなんだな」

よし子「あらそれは人間だって一緒よ」

黒ねこ「お前はどつ」

茶ねこ「僕は楽しいよ。新しい遊びが思いつかないときは、結構気が沈んじゃうけど」

よし子「新しい遊び？」

茶ねこ「うん。最近はね、石ころごっこにはまってんの。あの駅行く途中、何か高いところに公園あって、石段みたいになってるでしょ。あの三段目くらいのとこで、なるべくずっとじーっとしてるの」

よし子「何それ楽しいの」

茶ねこ「ううん、ちょっと飽きちゃった」

よし子「あらそつ。でもいいじゃない、遊んでるのが仕事なんて。はい、どうぞ」とよし子はお茶を差し出す。

黒ねこ「おいババア！ この、何だ、これ、この取っ手、これ無理だろ、猫の手的には！」

茶ねこ「持てたつて飲めないよ。猫舌だもの」

よし子「いいのよ」

よし子はゆっくりとお茶を飲む。

よし子「お茶なんてね、飲まなくていいのよ。あたしほら水曜日は毎週ココス行くでしょう。染谷さんと柴崎さんと。いつつ二時間もいてドリンクバーだけ、お店側にはホント迷惑よね、しかもドリンクバーって言うてもおかわり一杯するかしないかだし」

茶ねこ「それがおばちゃんの遊び」

よし子「そ」

茶ねこ「何が楽しいのあれ」

よし子「おしゃべり。ま、暇つぶしみたいな」

茶ねこ「これも暇つぶし」

よし子「そ」

茶ねこ「石ころごっこの方が楽しいよ」

よし子「遠慮しとくわ。……でもいい人生だった。ってまだ終わってないけど。こんな立派な、ねえ、一人で住むには広すぎる。おうちだって残してもらって。息子・娘も手が離れて。やることって言ったところして、ご飯作ってお洗濯してお掃除して、お茶飲んで。本、読んでみたり、何年かぶりに編み物はじめてみたり」

黒ねこ「俺たちと一緒じゃん」

よし子「何が」

黒ねこ「孤独とつまく付き合うこと」

茶ねこ「新しい遊びを考えること」

よし子「うん。でも人生は遊びじゃないわ」

茶ねこ「じゃ何」

よし子「何って、そりゃいろいろ。いろいろあつてみんな違うの。人にはみんなお役目があつて、遊んでちゃダメよ、お役目をきちんとね、一人ひとりが果たしていくんだからうちだったら、お父さんはお仕事。私はお母さん。男の子はまっすぐに、女の子はやさしく、ゆっくり大人になって。それぞれのお仕事、それぞれの役割をきちんとこなすの。猫と違って、人間はねえ、一人じゃ生きていけないんだから」

茶ねこ「なるほど」

よし子「幸せな人生だった。何にもできなかった、でも、家族を愛した。息子が総理大臣になったわけでもないし、娘が芸能人になったわけでもない、でも二人ともよくやって

る。ただ幸せに、普通に生きていく。それが一番難しいの。わかる？」

茶ねこ「わかるよ」

よし子「あらわかるのあんた」

茶ねこ「わかるよ」

よし子「んじゃ何で」

茶ねこ「ずっと見てたもの」

よし子「ああ」

二場すなわち、自殺だった可能性もあるか

高梨「奥さま」

よし子「ん？」

高梨「誰と話してたんですか」

よし子「たか、高梨さん。奥さまはやめてって言ったでしょう」

高梨「だって、奥さまでしょう」

よし子「いいえ。ただのおばさんです。よし子さん、ああいやよっちゃんていいわよ、よっちゃんて」

高梨「またまた」

よし子「あら本当よ。次からよっちゃんね、私」

高梨「けん太さんたち、そろそろお帰りになるそうです」

よし子「あらそう。お昼ごっか、一緒に食べ行こうと思ってたのに」

高梨「お通ししても？」

よし子「あのねえ、高梨さん」

高梨「はい」

よし子「そーんなカチンコチンにやられたら、かえって窮屈だわよ。それにここ、一応りビングよ？ けん太もここんちの子なんだから、通すも通さないも……。あら」とけん太とまち子が入ってくる。

けん太「じゃ、母さん。そろそろ」

よし子「うん」

まち子「どうも、お世話になりました」

よし子「いえいえ、ありがとうございますっ、あれこれ。ホント助かつちやった」

まち子「いえ、すみません、大したお役にも立てずに」

よし子「何、けん太、いつから仕事なの？」

けん太「明後日から」

よし子「何、明後日。ならいいじゃない、今日くらいゆっくりしてたら。お昼、郵便局の隣に何かできたのよ、ベトナムだかタイだかの」

高梨「トルコ料理です、あそこ」

けん太「いやあるんだよいろいろとさ、準備が。二日も現場、穴あけちゃったし」

よし子「今度はどこでやんの」

けん太「赤坂。いや今回、割といい椅子の劇場だからさ、招待出すよ」

よし子「わっかんないわよー、お母さんには」

けん太「いいよ、お話はわかんなくても。たまには観に来いよ、息子の仕事ぶりをさ」

よし子「そんなことより。ちゃんとお給料出てるの」

けん太「当たり前だろ。それで、食ってるんだから」

よし子「おどろき。でもあんた、保険とか年金とか、ちゃんとしてるの」

けん太「してるよ」

よし子「あ、そつね、まち子さんが」

けん太「や、自分で」

よし子「ああ。体につけなきゃダメよ。よろしく願いしますね、まち子さんも」

まち子「はい」

よし子「この子ほら、意外とちゃらんぼらんでしょ。ちゃらん村、ぼらん太郎くんでしょう」

まち子「あ、いえ」

よし子「ホントト、だらしないし。この年になってまだ食べられないものもあるし」

けん太「随分減ったよなあ」

まち子「うん」

よし子「時間だつて不規則なんだろうから、奥さんがしっかりしてあげなきゃダメよ。男の人は、もー、すぐ仕事にのめり込んで、食べる物も着る物もいい加減になっちゃうでしょう」

まち子「そうですね」

よし子「そうですねじゃダメよ。旦那さんがいい仕事できるかどうかは、奥さんにかかてるんだから。男の着る洋服を見れば妻の点数がわかる、なんて言うくらいでね。専業

主婦は専門職！　しっかりね」

まち子「はい」

けん太「まあ、こいつも仕事もあるし」

よし子「え？　あら、まだやめてないの」

まち子「それが」

よし子「八月でやめるって言ってたじゃない、ねえ？」

けん太「うん、まあ」

まち子「同僚が一人急に、ご家族に不幸があつて辞めてしまつて、それでどうしても」

よし子「大丈夫なの、あんた」

けん太「大丈夫だよ」

よし子「手が足りなかつたら言いなさい、お母さんもうすっかり暇なんだから、いつでも行くよ。お掃除くらいならしたげられるから」

けん太「大丈夫だつて。……じゃ、ホントにそろそろ」

よし子「お線香あげた、お父さんに」

けん太「さつき、あげてきたよ。(高梨に)じゃ、母のこと、どうぞ、よろしく願います」

高梨「はい」

けん太「こう見えて結構、これだし、これだし、大変ですよ」と、おしゃべり・鬼のポー

ズをする。

よし子「やだもー、ちょっと、けん太！」と、殴る。

けん太「いつて！」と、けん太、悶絶する。

高梨「え、あの、大丈夫ですか？」

よし子「天罰よ」

けん太「人災だろ」

高梨「何か、持ってきてましようか？」

けん太「ああいえ。（小声で）あの突っ込み、マジで痛いですから気をつけて下さい」

高梨「はい」

けん太「腕相撲、俺より強いんですから」

高梨「警戒します」

よし子「ちよっとそこ！ 何、こそこそ！」

けん太「まあ。こんだけ元気なら、大丈夫そつだな」

よし子「あら。影で泣いてんのよ、夜な夜な」

けん太「来週また、様子見に来るよ」

よし子「あらいいわよ、だって本番あるんでしょう、その、赤坂の」

とも美が入ってくる。手に何やら白い封筒をぶら下げて。

とも美「何、帰るの」

けん太「ああ」

少しだけ目を逸らす、それだけの気遣いしか見せずに、とも美はため息を漏らす。

けん太「何だよ」

とも美「まだ片付いてないんだけど、いろいろ」

けん太「え、そう？」

とも美「年金関係の書類出して、保険金の請求もして、公共料金とか住民票とかいろいろ
届け出だして、免許証からパスポートからクレジットカードから、あちこち電話かけた
り郵便送ったり」

けん太「高梨さんがやってくれるってさ、代理人の委任状はもう書いてもらったし」

とも美「来てもらったばかりで、そんなこと頼めないでしょう」

高梨「あ、いえ、僕は」

とも美「それに家族がやるもんじゃないの、こういうのは」

よし子「しょうがないじゃない、休めない仕事なんだから」

とも美「私だって無理して休みとってるんだよ」

けん太「じゃあ言ってくれよ、言ってくれなきゃわかんないだろ、そしたら俺だって少し
は」

とも美「私、自分で調べたんですけど」

よし子「やめなさい、みっともない。高梨さん、どうもすみません」

高梨「いえ」

とも美「今話さなきゃ話す機会ないでしょ？ 帰っちゃうんだから」

よし子「また話す機会なんかあるでしょう、いくらだって」

とも美「お通夜に遅刻してくるような人が、そんなことしてくれるかな」

けん太「まだ言うのかよ、それ」

とも美「いや別にそこはいいの、あぁやっぱりなって思ったただけだし」

けん太「お前何が言いたいんだよ」

よし子「しょうがないじゃない、仕事なんだから」

とも美「お母さん。だから、仕事は私も休んでるの」

よし子「もちろん。わかってますよ」

けん太「母さんには言ったけど、来週一度、顔出すから」

とも美「いつ？」

けん太「とも美な、いや、悪いと思ってるよ？ 正直、そこまで気づかなかったし。俺だ

ってやっぱり少し、動転してるんだよ、親父が急にあんなことになって」

とも美「動転してたんならさ、愚図々々してないでさっさと飛んでくりゃよかったじゃな

い、でなきや帰って来なきやよかった、そつでしょ違つ？」

よし子「とも美」

とも美「そついう約束でしょ？」

よし子「とも美！」

こいつには話しても無駄だ、そついう諦めを感じながら、しかしけん太は後味の悪さを拭おうとして、また口を開く。

けん太「そんな、ギャンギャン言つなよ。真剣に考えてくれてるのは嬉しいけど、言い方を少し」

とも美「じゃあお願いしていい？」

けん太「何だよ」

とも美「戸籍謄本持ってきてくれる、大急ぎで」

けん太、困惑に顔を歪めながら、

けん太「わかったよ、今から行ってくるよ。幼稚園の隣に出張所あるよな、あそこで」

とも美「違つよ。お兄ちゃんたちの。今、本籍、豊島区なんですよ」

けん太、一瞬意味を飲み込めない。

けん太「俺の？ 何で？」

とも美「遺言書の検認に必要なの。法定相続人全員の。検認ってわかる？ 裁判所で」

よし子「ちよつと待って、遺言書？ え？ 誰の？」

とも美「お父さんのに決まってるでしょう。書斎の机の、一番上の引き出し。探してもしな

かったの？」

よし子「だって、事故でしょう、お父さん」

とも美「事故には違いはないけど」

よし子「それなの」

とも美「これだよ」

よし子「貸して」と、よし子は封筒を奪おうとする。

とも美「待って待って待って」

よし子「貸しなさい、ともちゃん」

とも美「開けない？」

よし子「開けるわよ。開けちゃいけないわけじゃないでしょ」

とも美「開けちゃいけないわけあるの。家庭裁判所に持って行って、検認手続きっての、しなきゃならないのね。だから」

よし子「何で遺言書なんかあるのよ？」

とも美「それは、開けてみないと」

よし子「事故でしょう、だって」

とも美「事故だよ、だから、でも」

よし子「でも？」

間。

けん太「自殺だった可能性もある、か」

と、大変ポップな音楽が流れる。家族はそのまま、彫刻となる。

三場すなわち、茶番

傍から様子を見ていた茶ねこ・黒ねこがずいずいと登場してきて、喋り始める。

茶ねこ「いやいやいやいやいや！ あり得へんあり得へん！」

黒ねこ「ベタやー！ ベタやでー！ 『自殺だった可能性もある、か』とか、火サスやで

ー！ 火サス始まるでー！」

茶ねこ「お医者はんも言うてはりましたやろ、お父はん糖尿病やったから急性の糖尿病性昏睡による意識障害やったって、言うてはりましたやろー！」

黒ねこ「血糖値四百以上ありましたからなー！ しゃあないでー！」

茶ねこ「ほんまやでー！」

よし子「落ち着いて、みんな。関西弁は、やめて」

黒ねこ「自殺だった可能性もある、か」

茶ねこ「そう早合点するもんじゃないわ。こういうときこそ冷静にならなくちゃね」

黒ねこ「死人に口なし、……お嬢さん、クチナシの花言葉をご存知で？」

茶ねこ「えっ？」

黒ねこ「クチナシの花言葉、それは……、『胸に秘めた愛』」

よし子「落ち着いて、みんな。茶番はもう、それくらいにして」

黒ねこ「そうだけ、茶番もいとこだけ」

茶ねこ「お遊びはここまでだ！」

よし子「あるわけじゃないじゃないの、お父さんに限って。火サスって、やめてよね冗談じゃないバカバカしい、何よあれ、いつつもいつつも、崖っ淵が集合場所にでもなってるの、

黒ねこ「崖っ淵が好きなんだよ、人間というものは」

よし子「これは現実なの、映画でもドラマでもないの。運転中にふっと意識が遠のいて、

対向車線のトラックにぶつかった、それだけ。ただそれだけ。お巡りさんだってそう言

つてたでしょ？」

黒ねこ「しかしその裏に秘められた真実が、今まさに明らかに」

よし子「明らかになりません、解き明かされません、何もありません。オチもないしどんでん返しもありません、現実には。ホント、お芝居は嫌い。すぐ人が死んだり、不幸になつたりする。火曜八時の暇つぶしに、ぼんぼん人殺して、悪趣味よ」

茶ねこ「でも驚いてた」

よし子「ちよっぴりね。でもわかるわ。ありそつなことでしょ。何かあったときのために財産分与について書いておくなんて、だってお父さん、税理士よ？ とも美がぶりぶり屋さんなのは相変わらず。けん太はねえ、昔よりだいぶしっかりしてきたけど時々ああいうこと言い出すのよ、突飛なこと言い出して得意になって。いつものこと」

黒ねこ「あ、ピンと来た。見てほら今俺、ピンとしてない、おヒゲ」

よし子「うん、ちよつと、見えないわ」

黒ねこ「今すぐにうちを出ていきなさい！」

茶ねこ「そうだ、けん太。出ていきなさい。勘当だ！」

黒ねこ「ああ、どうしてこんなことに。よよよ」

茶ねこ「母さん！ 許してくれ！」

黒ねこ「あなた！」

よし子「ああ。あつたわねえ、そんなことも」

黒ねこ「子どもつてのは本当、身勝手に夢見がちでさ。親の気持ちなんか、これっぽっちも考えちゃいない。よく言ったよ、あのとき」

茶ねこ「なかなかの迫力だったね」

よし子「今すぐにうちを、出て行きなさい！」

黒ねこ「違う違う。ちよつと貸して」とエプロンを借りようとする。

よし子「ええ？」

黒ねこ「誰かが言わなきゃいけない、誰かがやらなきゃいけない、家の中じゃそついつ」とは全部母親任せだもんな。損な役回りだよ

茶ねこ「苦労するよね」

よし子「お芝居は嫌って言ったでしょう」

黒ねこ「今のおんたじゃ無理だからね」

よし子「どゆこと」

黒ねこ「年をとると気が弱くなるのは猫も人間も一緒、仕方ないことだよ」

四場すなわち、けん太勘当

黒ねこ「今すぐにうちを出ていきなさい！」

よし子「そんなに大きな声出した、私？」

茶ねこ「結構出てたよ」

ゆき男「何もそつ頭ごなしに怒鳴りつけなくてもいいだろ」

黒ねこ「だって、あんまりバカバカしくって。お話にもならない。ああ嫌だ、夢でも見て

んのかしら私したら南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

けん太「月末には引越すよ。荻窪で、四万円の物件が」

黒ねこ「やめてちょうだい、一つずつちゃんと話してくれないと」

けん太「だから全部話した通りだよ。大学はやめる。都内に引越す。自分の力で」

黒ねこ「で何やんの。コンビニの店員なんかやって、将来どうするつもり」

けん太「だから」

とも美「ねえ、上行っていい？」

黒ねこ「いなさい、ここ！ 家族のこと話してるんだから」

とも美「私関係ないでしょ、お兄ちゃんの好きにしたら」

黒ねこ「関係ないことないでしょ、どうすんのあんだ、私たち死んだらあんだとお兄ちゃん二人きりなのよ」

とも美「別にいいよ、一緒に暮らすわけでもないし」と、ニンテンドーDSをやり始める。

黒ねこ「まずそれやめなさい、その、ファミコン！」

とも美「ファミコンじゃないよ」

黒ねこ「脳トレしよう、知ってるわよ！」

とも美「ああ、もういいよ、何でも」

よし子「ホントにとも美は、面倒になるとすぐこうやってそっぽ向いちゃうのよ、ははは」

黒ねこ「笑い事じゃないでしょ！ とにかくいなさい。けん太、あんだお願いだから、大
学だけは」

けん太「母さん、だから俺、もう決めたんだ」

黒ねこ「大体、決めたって何よ、コンビニのバイトでもしながら、え、四万円？ お風呂

ついてんの、そこ」

けん太「ついてない」

黒ねこ「ほら見なさい。死んでしまってください」

けん太「近くに銭湯あるから」

黒ねこ「今どき東京のご真ん中に、あるわけないでしょ、銭湯なんか！」

けん太「あるよ」

ゆき男「あるよな」

とも美「うん」

黒ねこ「違うの。お母さんお風呂の話がしたいんじゃないの。まさかトイレもついてない
んじゃないでしょうね」

けん太「ついてないよ」

黒ねこ「ああ怖い。恐ろしいわ。鍵もついてないようなところじゃないの」

けん太「それはついてるよ、鍵くらい」

黒ねこ「鍵がついてたってね！ トイレとお風呂がないとこで、死んでしまってください！」

けん太「死ぬことは、ない」

黒ねこ「けん太あんだね、お母さん何も知らないと思ってんでしょ。お母さん見たんだか
らこないだテレビで、久本雅美出ててね、昔劇団やってた頃、お金がないからお部屋の
流しに乗っかって、水道から水浴びしてたんですって、あー恐ろしい」

けん太「だから何だよ」

黒ねこ「あれはね、マチヤミだからできることなの。異常なことなの」

けん太「マチヤミだって、人間だろ」

黒ねこ「お湯も出ないのよ」

けん太「お湯は出ない」

黒ねこ「冬なんかどうすんの、死んじゃうでしょ」

けん太「だから銭湯が」

黒ねこ「銭湯はある、それはわかりました。ちゃんと聞いているんだからお母さん覚えてます銭湯あるアナタ言ってたの。でもそういう話してるんじゃないでしょ今！」

けん太「違うのかよ……」

よし子「私こんなこと言ってた」

茶ねこ「言ってたよ」

黒ねこ「大体何よこれ、三年通って二単位って、二単位はないでしょう二単位は。大体、何で二単位だけとったの！ 二！ 男らしくない、まだゼロの方がすっきりするわ」

ゆき男「母さん、言ってることが滅茶苦茶だよ」

黒ねこ「ああそつよ、滅茶苦茶よ、私の心は滅茶苦茶に踏み荒らされて、ぺんぺん草一本残ってないんだからね！ ああダメ。お母さんもダメ。寿命縮まったわ五十年くらい。大事に大事に育ててきて、大学まで行かせてやって、こんな仕打ち。んん、お父さんも言ってるやっつて下さいな」

ゆき男「本気なのか」

けん太「ああ」

黒ねこ「嘘おつしやい」

けん太「嘘じゃない」

黒ねこ「あらごめん遊ばせ、お芝居がお上手って聞いたから、てっきり嘘つかれてんのかと思った」

ゆき男「母さん、ちよつと」

けん太「違うんだよ、母さん」

黒ねこ「何が」

けん太「嘘じゃないんだよ。芝居つてのは、嘘じゃなくて、本当のことを作るんだよ。嘘をつくのど、演技をするのは、全然違う」

黒ねこ「聞いたくありませんそんな話」

けん太「作り手側が本当だって信じて作っていくと、客にもわかるんだよ。一瞬、本当かもって、思える瞬間があつて」

黒ねこ「そんな誰にでもできることじゃないんだから、あんた倍率何倍あるかわかつて言ってるの、その世界」

けん太「わかんないよ、そんなの」

黒ねこ「あんたになんか、できるわけないでしょ」

けん太、臍を噛むような気持ち。

ゆき男「けん太」

食卓を囲む一同の視線が、ゆき男に集まる。

ゆき男「出てきなさい」

黒ねこ「ほら」

けん太「でもね父さん」

ゆき男「ちよつと俺にも喋らせてくれ」

けん太「……ああ」

ゆき男「荻窪のその家、保証人がいるだろ」

けん太「いるけど」

ゆき男「ハンコ、押してやるから後で紙持って来い」

黒ねこ「ちよつとお父さん」

ゆき男「だから母さん、ちよつと俺にも、喋らせてくれよ」

黒ねこ「私は許しませんよ、こんな、顔に泥塗られて」

ゆき男「そのハンコで最後だ。一切、援助はしない。金も食い物も、送らない」

けん太「当たり前だろ。ちゃんとやってくよ」

ゆき男「嘘じゃないな」

けん太「嘘じゃない」

ゆき男「でもお前は、嘘をついたよな」

けん太「違うよ、本当に」

ゆき男「三年間、講義に出てなかった。大学に行くって言って毎朝家を出て、大学から帰って来たって言って、父さんと母さんを騙してたわけだ」

けん太「騙すつもりじゃ」

ゆき男「お前そんな、嘘つきでいいのか。嘘つきで何だ、できんのか、演劇」

黒ねこ「だから考え直しなさい。せめて卒業してから」

間。

けん太「勘当されるのも、覚悟の上です」

ゆき男「勘弁してくれよ、そんな覚悟は。それに戦後の民法では勘当なんて戸籍処理はできないんだ。血は水よりも濃いつて言うだろ。水どころか、鎖だよ。絶対に切れない。

だから、お前が犯罪を犯したり、借金抱えたりしたら、いずれ俺と母さんに迷惑がかかる」

けん太「はい」

ゆき男「法律上できるのは相続廃除と言って、俺が死んだ後、まあ金なんかどうでもいいけど、けじめだからな。家裁に申し立てだけはしておくよ」

けん太「はい」

ゆき男「それでもいいのか」

けん太「はい」

ゆき男「本当だな」

けん太「何回も訊くなよ」

ゆき男「そうか」

黒ねこ「ちよつと、お父さん」

ゆき男「よし」

黒ねこ「何がよしなのよ」

間。ゆき男、お茶を飲む。

ゆき男「いやこないだテレビでな、どんな名優でも地元の劇場では足がすくむ、えらい評論家より家族の方がよっぽど手強い、なんて言ってるな。地井武男が」

けん太「あの人、散歩以外もしてんだ、最近」

ゆき男「いや散歩中に言ってたんだがな」

けん太「ああ」

ゆき男「いや一本とられたよ、全く」

とも美「私気づいてたけどね」

ゆき男「そうか」

黒ねこ「わ、私も怪しい匂いを嗅ぎとってはいましたよ」

けん太「でも俺、俳優じゃなくて、脚本がやりたいんだ」

ゆき男「何だ。出ないのか、舞台。出るんなら観たかったけどな、おお、ロミオよロミオ、ってな」

けん太「それジュリエットの台詞だよ、女の方の」

ゆき男「そうか」

けん太「俺、嘘、うまいからさ。悪い嘘じゃなくて、いい嘘書くよ。人を感動させるような」

ゆき男、メモとペンを取り、何か書き始める。

黒ねこ「お母さんは嫌だから」

けん太「母さん」

黒ねこ「けん太ね。人生、まだ長いんだから、いくらでもやり直せる。人生は遊びじゃないの。ちゃんと先のことまで考えてくれなきゃ」

とも美「私行くね」

黒ねこ「いなさい、ここ、とも美！」

しかしとも美は立ち去ってしまう。黒ねこはそれを苦々しげに見送る。

黒ねこ「ねえけん太。行ってご覧、大学。つらいかもしれないけど、つらいから人生なの。つらいことをするから、お金が稼げて、ご飯が食べられるの」

けん太「つらいの、母さんは」

黒ねこ「私は幸せ。だって、真面目に生きてきたもの。だからね、あなたも。卒業だけはしなさい。その頃にはもう、演劇なんてね、そんな馬鹿げた考え、すっかりなくなってるから。お母さんの、言う通りにご覧なさい。うちの会計事務所、お祖父さんの代から続いているのよ。あなたに継いで欲しいの、お父さんもお母さんも。嫌よ、お母さん、知らない人にうちの事務所譲り渡すなんて」

けん太「母さんの事務所じゃないだろ」

黒ねこ「だからそれは、同じことなの」

ゆき男「けん太。これ、読みなさい」と、紙切れを渡す。

けん太「……いち。社会・世間に迷惑をかけること。に。経済的に自立すること。さん。健康に気をつけること。よん。健康に気をつけること。」。母さんを悲しませないこと

ゆき男、煙草に火をつけて、それを聞いていたが、

ゆき男「戻って来るなよ」

けん太「はい」

ゆき男「ま、たまには戻って来いよ」

けん太「無駄にしてみました学費は、いつか必ず、お返しします」

ゆき男「期待しないで待ってるよ」

けん太「必ず返します。必ず」

黒ねこ「バカバカしい」

ゆき男「いやあ、うらやましいよ、お前が」

よし子「何がうらやましいよ。後先のこととも考えないで。あなたがちゃんと考えないでどうするの。いい気になって、カツコつけて。ダメでしょう、親がしっかりしてやらないと。何の苦労も知らない子どもに、自分のことなんてわかるわけないでしょう。周りがちゃんとしてやらないと」

ゆき男「よし子？ どうした」と、黒ねこに話し掛ける。

よし子「あなた今、優しい、心の広い父親を演じたつもりかもしれませんがね、実際はただ突き放しただけ、こんな残酷なことないわよ」

黒ねこ「あなた今、優しい、心の広い父親を演じたつもりかもしれませんがね、実際はただ突き放しただけ、こんな残酷なことないわよ」

ゆき男「けん太はもう、大人なんだ」

よし子「親が敢えて厳しいこと言ってやらなきゃ、誰がこの子らを守ってくれるの」

黒ねこ「親が敢えて厳しいこと言ってやらなきゃ、誰がこの子らを守ってくれるの？」

よし子「何でさっきあなた、うらやましいって言ったの？」

黒ねこ「何でさっきあなた」

ゆき男「何」

黒ねこ「何でもない」

よし子「ちゃんと、聞きなさいよ、何でさっきあなた、うらやましいって」

五場すなわち、高梨への愚弄

高梨「奥さま」

よし子、高梨の方に振り返る。

高梨「じゃなかった。よっちゃん。あ、ごめんなさい、やっぱり無理です、これ」

よし子「どしたの」

高梨「さっきお電話ありまして、けん太さんたち、夕方までにもう一度戻るそうです」

よし子「どして」

高梨「いえだから。家庭裁判所の窓口、五時までだそうですから、臆本取って」

よし子「そんなに急いでるの」

高梨「まあ、明後日からお仕事だそうですし、早い方が」

よし子「遺書は今どこ。ああ、遺書みたいなもの」

高梨「多分、とも美さんが」

よし子「多分じゃないでしょう。ちゃんとしてくれないと」

高梨「あ、すみません」

よし子「何してたの」

高梨「え？」

よし子「あなた何してたの今まで」

高梨「いえ、お言いつけ通り、お部屋のお片づけを」

よし子「入ったの、お父さんの書斎」

高梨「え？」

よし子「入ったのかって聞いてるんだけど」

高梨「はい」

よし子「どうだった」

高梨「いえ、別に、……本当に、几帳面な方だったんですね。チリ一つ落ちてない」

よし子「違うわよ」

高梨「と言うと」

よし子「床のお掃除は私。私がしてたのよ。机の上には指一本触れませんでしたけど。チリ一つ落ちてないのは、私が」

黒ねこ「あなたがやったのね」

茶ねこ「あなたがやった」

よし子「私がやったの」

高梨「ああ、そうでしたか」

よし子「もちろん机には触らなかったけどね。嫌でしょう、机、触られるのって、男の人は？」

高梨「ええ、まあ」

よし子「なのにあの子ったら」

高梨、どう返事をしていいのかわからない。

高梨「お優しい方、だったんでしょね」

よし子「あの人？」

高梨「ええ。ほら、机の左側に、写真いっぱい、貼ってあるでしょう。ご家族で撮った。写真を見るとその人がわかる、とまでは言わないですけど」

よし子「何」

高梨「あ、いえ、いやきつと、優しい人、だったんだろうなあ、って。あ、僕昔、少しだけ写真かじってたんですけど」

よし子「趣味で？」

高梨「あ、いえ、趣味っていうか、ガチで。専門学校行って。まあ、全然モノにならないかったんですけど」

黒ねこ「なあんだ」

よし子「そうでしょう？」

高梨「え？」

よし子「そりゃあ難しいんでしょう、写真でプロになる、なんてのは」

高梨「まあ、そうですね。三年くらい、半分フリーターやりながら続けたんですけど、もうすつぱり、諦めました」

よし子「よかったじゃない。あなた向いてるわよ、この仕事。男の家政婦なんて、はじめて聞いたけど」

高梨「結構、需要あるらしいですよ。力仕事とか、機械いじりとか、あとほら防犯にもなるし、ご高齢の女性層に特に人気あるらしくて」

よし子「あらやだ失礼しちゃう。ご高齢？」

高梨「あ、いえ」

よし子「あなた明日から来なくていいから」

高梨「あ、いえ、すみません！　そういうわけじゃ
よし子「なんて、うっそー」

高梨、苦笑いの愛想笑い。

よし子「お茶飲む？」

高梨「やりますよ、僕」

よし子「ありがとう。でもね、自分でやりたいの」とお茶を淹れながら、

よし子「いやホント助かるわー、お掃除から何から全部やってくれるんだから。もう、ず
っとしてもらいたいくらい」

高梨「ありがとうございます」

よし子「ちょっとわかるわ、お父さんの気持ち。仕事がなくなるとこんなに暇なのね。寂

しいって言うか、空っぽよ。それで死んじゃったのかしら、あの人」

高梨「え、じゃあ、自殺と想ってらっしゃるんですか？」

よし子「あらゆる可能性を考えなきゃ。今でもたまに、撮ったりするの？」

高梨「何が？」

よし子「写真」

高梨「まあ、たまに、ですけど。お休みの日とかに」

よし子「よしなさい」

高梨「え？」

よし子「あなたこれバイトでしょうっ？」

高梨「ええ、まあ」

よし子「遊んでる場合じゃないじゃない。もう二十八なんでしょう。ちょっと遅いけど、

今ならまだ間に合うから」

高梨「はい」

よし子「結婚もしたいでしょう。家だつて車だつて欲しいでしょう。子供ができれば、奥
さん連れて、年に一度の温泉旅行くらい行きたいでしょう。つらいかもしれないけど、
きちんと自分の仕事を見つけて、そこに生きなくちゃ」

黒ねこ「全くだよ」

茶ねこ「温泉行きたい」

高梨は返事ができない。

よし子「お茶、どうぞ」

高梨「いえ」

よし子「いいの」

高梨「仕事、してきます」

よし子「あらご苦労なこと。頑張つてね」

高梨「はい」

高梨、去る。

六場すなわち、茶番その2

よし子「飲む？　あんたたち」

黒ねこ「男は、タフでなくちゃ生きていけない。優しくなければ、生きていく資格がない。茶ねこ「ちよっと、お散歩でも行こうよ。何だか鼻がむずむずしてきた」と、せつせと顔を洗う。

よし子「本当、何だか嫌な空模様。お通夜もお葬式もいい天気だったのに。私雨、大っ嫌い。でもね、あの人雨、好きだったのよ。来客が減って一人でいられるから、好きなんですって」

黒ねこ「本当、平成の男はだらしくなかって仕方ねえな。さっきの男もカメラが好きだなんて、ナヨナヨしてて気持ち悪いぜ。やっぱり男は、竹槍持ってB29に立ち向かうような根性がなきや」

茶ねこ「お散歩行こうよ、遊びたいよ」

黒ねこ「あのボサボサねーちゃんさ」

よし子「とも美のこと？」

黒ねこ「そ。完全なファザコンだろ、あれ？ 葬式でもわんわん泣いて、おまけに着てる服がどう見ても安物だし。もう、みつともないっいたらなかったよな」

茶ねこ「泣きたいのはお母さんの方だよねえ」

黒ねこ「まあちよっと、過敏になってんだよ。泣いて、わめいて、当たり散らして、消化しよつとしてんのさ」

茶ねこ「そんなに悪く言わなくても」

黒ねこ「いや。甘たれてんのさ。贅沢に慣れちまうと、人間も猫もおしめえよ。猫なんて、年がら年中泣いてるのに、だーれも構っちゃくれないんだから」

茶ねこ「泣いてるの？」

黒ねこ「表には快樂はくらくを装い、心に思い煩う、それが猫ってもんさ。アスファルトに唾吐きながら、エサを求めて愛想笑いの毎日よ。にゃあ」

よし子「まだ子どもなのよ。相手の立場に立って考えるってことが、もう全然だめ。私がいくら心配しても、うるさい、うるさい、自分でやる、って。自分じゃ何にもできないのこ」

茶ねこ「あ、今ぼく毛え逆立った。見てほら僕、背中んとこ、毛え逆立ってるでしょ」

よし子「うん、ちよっと、見えないわ」

茶ねこ「不思議なもんだよ、どうして人間って、思い出したくもないことばっか、思い出すようにできてんのかな」

よし子「どしたの」

茶ねこ「ともちゃんがジュケンしてた頃の話」

よし子「ああ」

茶ねこ「おばちゃん、かわいそうでありました。おばちゃん、さみしそうでありました。お兄ちゃんは毎晩大学で遅くって、おばちゃん、一人きりでありました。お夜食、いつも、食べてもらえませんでした。愛とはつまり、一方通行の矢印なのだと、それでも折れない矢印なのだと知ったあの夜のことでした」

よし子「少しキャラが変わったわよ」

茶ねこ「あの頃のことを思い出すと、ぼくの毛はいつも逆立ってしまうのです」

七場すなわち、とも美の反発

ゆき男「だからそこはコサインだ」

とも美「でもここは二項定理への代入により」

ゆき男「だから点pが一定の速度で二次曲線F Xの上を移動するときたかしくんのお財布にはド・モルガンの法則によりラージAおよびラージBの式が」

とも美「じゃあタンジェントじゃないの」

ゆき男「いいやコサインだ」

茶ねこ「ともちゃん」

ゆき男「いいか、点qは $y = ax + b$ の二乗ルートb分のマイナス4acだから」

とも美「でも楕円関数の発散によりたかしくんのシグマが極大化して」

ゆき男「違うだろ、問題よく読め、たかしくんはりんごを」

とも美「わかってるよ、たかしくんはダイエーでりんごを三個買ったから百八十円で」と計算している。

茶ねこ「ともちゃん」

とも美「やっぱりタンジェントじゃない」

ゆき男「いいやコサインだ」

茶ねこ「あなた」

ゆき男「はい」

茶ねこ「もう二時よ。明日も仕事でしょう」

ゆき男「もうそんな時間か。あんまり無理するなよ」と、手近なものをまとめたりする。

とも美「わかってる」

茶ねこ「ともちゃん隊長、支援物資、到着しました」。なんちゃって、ただのお夜食。は

い。マスカルポーネチーズの南欧風フィットチーネと、ぼた餅」

とも美「何それ」

茶ねこ「チーズとあんこは頭にいいんですって、今朝ね、みの方が言ってた。あ、あな

た、ちゃんとお風呂入って下さいね」

ゆき男「ああ」

と、ゆき男去る。

茶ねこ「サイン、コサイン、タンジェント！ 懐かしいわー、全然わかんなかったけど、

何度聞いてもちよっと面白い響きよね。魔法使いみたい。アブラカタブラ」

とも美「おやすみ」

茶ねこ「あら。食べないの？」

とも美「だからいいって言ってるでしょ、いつも」

茶ねこ「でもみのさんが」

とも美「チーズとあんこ食べたからって受かるわけではないじゃない大学」

茶ねこ「ああそつだ、何かね、頭がよくなる体操ってのも紹介してね、こついう、何か

ね、こついう」と何やら体操をしている茶ねこ。

とも美「いいよ」

茶ねこ「寝るの？」

とも美「うん」

茶ねこ「あなた昨夜五時くらいまで起きてたでしょ」

とも美「今日は早めに寝るから」

茶ねこ「宵っ張りでお勉強なのは偉いけど、朝、ちゃんと起きてよね」

とも美「いいよ、起こさなくて」

茶ねこ「起こさなかったらずっと寝てるんだもん、あんた」

とも美「だってあと二週間しか」

茶ねこ「そんなに無理して頑張らなくていいのよ。体壊したら元も子もないじゃない。寝

ても覚めても勉強、勉強って」

とも美「でもやらなきゃ」

茶ねこ「お兄ちゃんとあなたは違うんだから」

とも美「びくりと反応する。」

とも美「わかってるよ、そんなの」

茶ねこ「だったら。無理してお兄ちゃんと同じ大学受ける必要ないじゃない？」

とも美「そんな風に思ってたの？」

茶ねこ「せっかくねえ、推薦だって取れたんだから、そんなに」

とも美「行きたい学部があって、一番レベルも高いから」

茶ねこ「いい大学に行くだけがすべてじゃないでしょ？」

とも美「お兄ちゃんときは逆のこと言ってたじゃない」

茶ねこ「ほら、あんたの方でしょ、お兄ちゃんと自分と、いつの間にか比べて、勝手に」

とも美「違います」

茶ねこ「お兄ちゃんとあなたは、違うんだから。いいのよ、ともちゃんは、ともちゃんの

やりたいようにやって」

とも美「うんざりして頭をぼさぼさとかきむしる。」

とも美「やりたいように、やっています。だからほっといてくれませんか」

茶ねこ「何、その言い方。え？」

とも美「勉強したくて勉強してるんだからほっといてよ！」

とも美「立ち去るうとする。」

茶ねこ「待ちなさい」

とも美「おやすみ」

茶ねこ「待ちなさい、とも美！」

茶ねこ「、とも美の手を取る。」

茶ねこ「どうして？ どうして私にだけつらくあたるのよ。そりゃ私はサインも「サイン

もチンプンカンプンのアブラカタブラだけど」

とも美「寝るって言うてるでしょ」

茶ねこ「数学はわかなくても、相談くらい」

とも美「ないよ、相談したいことなんか」

茶ねこ「そうやってどうせ、馬鹿にしてるんでしょお母さんのこと。大学も出てない、サ

インも「サインも知らない」

とも美「時間がないの、あともう二週間しかないって言ったでしょさっき」

茶ねこ「悪いけどね、サインコサイン知らなくなっただね、見てご覧なさい私、幸せに」とも美「あぁもつ話しても無駄だから」

茶ねこ「お母さん心配なの」

とも美「なら寝かせてよ!」

とも美「少し泣いている。」

ゆき男「どうした?」と奥から声。

茶ねこ「ひどい」

とも美「泣かないでよ」

茶ねこ「苦労して育ててきて、何でこんな酷いこと言われなきゃならないの」

とも美「ごめん」

茶ねこ「心配して言っただけであげてんでしょ! どうしてお母さんの話だけ聞いてくれないの。

数学わかんないと、喋っちゃいけないの? そろばんでできれば十分生きていけます」

とも美「お母さんはそうだろうけど」

茶ねこ「何、また馬鹿にしてるの」

とも美「違うよ」

茶ねこ「大体、女の子なのにパソコンだか何だかの学部入って、どうすんの」

とも美「やりたいんだから、いいでしょ」

茶ねこ「仕事にするの」

とも美「うん」

茶ねこ「やめなさい」

とも美「何で」

茶ねこ「あなたには向いてない」

とも美「何で」

茶ねこ「じゃあ何で向いてると思うの」

とも美「一人でできるから」

茶ねこ「え?」

とも美「あたし集団生活とか向いてないでしょ? クラスも部活も、うざっただけだし。

息苦しくって。向いてないんだよそういうの。一人でやれる仕事がいいの」

茶ねこ「人は。一人じゃ生きていけません」

とも美「そんなこと言ってるわけじゃ」

茶ねこ「あなたもね。今じゃ一人で大きくなったような顔してるけど、誰が」

とも美「やめてよ、そういう話」

茶ねこ「誰がうち拭いて鼻水すすって、……心配しちゃいけないの? 母親が。確かに

ともちゃんは、ちょっと引っ込み思案なところ、あるよね。わかるよ。でもね、だから、

だから逆に、一人じゃできない仕事の方が、お母さんいいと思うの」

とも美「嫌だっけ言っただけでしょ」

茶ねこ「お勉強より大事なことがあるの。わかる? いろんな人と会って。いろんな人と

仲良くなっただけ。助けてあげたり、助けてもらったり。ちゃんと人の気持ちがあわかってや

れる、そういう子に育って欲しいなあ、お母さん。いずれ結婚もするんだから」

とも美「合格したら考えるよ」

茶ねこ「合格しなかったら、どうするの」
とも美「最低」

茶ねこ「ごめんね、でも考えておかないといけないでしょ？ 浪人したっていいけど」
とも美「結局信用してないでしょ私のこと」

茶ねこ「いい大学行くだけが全部じゃないんだから。一つや二つ、確実なことも受けたい方が」

とも美「受験料もつたないから。受かったってどうせ行かないし」
茶ねこ「お金のことなら心配しないで」

とも美「誰が稼いだお金だと思ってるの！」

問。

けん太「ただいまー」と奥から声。

茶ねこ「わかったわよ。もう心配してあげない。夜食も作らないし朝も起こさないし、朝ご飯も晩ご飯も勝手にしなさい」

とも美「お父さんが毎日、嫌な思いして稼いできてくれてるんだよ」

茶ねこ「そうやってお父さんの肩はつか持って」

けん太、部屋に入り、「ん？」

とも美「おかえり」

けん太「おいとも美ー。母さん泣かすなよ」

とも美「勝手に泣いた」

けん太「勝手に泣くわけないだろ。まあ、受験で苛々してるのはわかるけど」

とも美「ああもうホントうんざり。お願いだからほっといてよ」

茶ねこ「喧嘩しないで。お母さん、愛してるのよ、二人とも、おんなじくらい。比べてなんかいない」

よし子「本当どこで育て方間違ったのかしら」

とも美「絶対受かるから」

茶ねこ「わかった。でもどんな結果になっても、お母さんともちゃんの味方よ」

よし子「結局最後は私が尻ぬぐいするんだから」

とも美「絶対受かるから」

茶ねこ「心配してるんだから。本当に、本当に、心配してるんだから。私」

よし子「どうしてわかってくれないのよ、本当自分のことばかり」

とも美、勉強道具を持って、立ち去る。

けん太「あ、マスカルポーネチーズのフィットチーネと、ぼた餅。ねえ何でマスカルポーネチーズのフィットチーネとぼた餅あるの、これ？ ねえ俺食べていいこれ、マスカルポーネチーズのフィットチーネとぼた餅」

茶ねこ「食べちゃって。うちのお姫様はご機嫌斜めでね。ご飯も喉を通らないんですって」

けん太「どしたの」

茶ねこ「あなたに対抗意識張ってるのよ、無理していい大学受けようと思って」

けん太「ああ」

茶ねこ「勉強するのは勝手だけど、人に当たり散らさないで欲しいわ」

けん太「対抗意識って、あんなかねえ、ホントそんな」

茶ねこ「そりゃあんたには見せないわよ。私にはわかるの。サインコサインはアブラカタ
ブラだけど、母親ですからね、一応」

八場すなわち、息子の気遣い

けん太「母さん」

よし子「え」

けん太「誰と話してたのさ」

よし子「もう帰ってきたの？ まち子さんは？」

けん太「いるだろ、そこ」

まち子「どうも」

けん太「しかしホント、役場つてのはさ、コンビニみたいにシンプルにやれないもんかね。

あっちゃこつちや引き回されて。一・二時間いただけで嫌^やなっちゃったよ」

よし子「あんたは私のこと見捨てないわね、けん太」

けん太「当たり前だろ」

よし子「とも美に任せといちゃダメよ。あの子すぐ何でも自分の都合のいい方にとるんだ
から」

けん太「ああ」

よし子「あの子は頭でしか考えないの、人の心を、心で考えるってことをもう少し」

けん太「母さん。……ほら、これ、虎屋のどら焼き買って来たから、お茶でも淹れて食べ

よ。あ、お前さ」

まち子「うん。あ、私、やりま」とお茶の準備を始めるが、

よし子「触らないで頂戴。私、自分でやれますから。……お二人もいかが？」

けん太「ああ。もらおうかな」

よし子「あなたたちは？」

黒ねこ・茶ねこ「結構です」

よし子はゆつくりとお茶を淹れる。

けん太「まだ一週間だもんな」

よし子「何が」

けん太「死んでから、父さん」

よし子「まだそれだけ。まだそれだけしか経ってないの。お母さんも五十は老けたわ」

けん太「死ぬだろ、五十老けたら」

よし子「そうよ。私も死ぬのよ、いずれ」

けん太「やめろって」

よし子「あら本当のことじゃない。あんたの大好きなお芝居と違ってね、人生にハッピー

エンドはないの。死んでおしまい。みんなそう。あんた何言おうとしたの？」

けん太「いや、何かさ。実感なくてさ」

よし子「当たり前よ、あんな急な、ホント、自殺だなんて馬鹿なこと、あり得ない」

けん太「うん、それもだけど、この部屋さ。このテーブル。懐かしいだろ。壁の色も、ソ

ファアの破け方も、テレビの上に、あれあの香水結局使わなかったんだな、埃がぶつち

やってるよ」

よし子「だってー、もったいなくて。大事にしてるわよ」

けん太「なのに全然、別の部屋にいるみたい。匂いが違うんだよな。親父いつやめたんだっけ、煙草」

よし子「半年前よ。六十五になつてしばらくして。コレステロールも高かったんだから」
けん太「親父の匂いがしなくて、お袋の匂いだけする。だから変なんだろうな。お通夜も告別式も、何か実感なかったんだよね俺。周りがわんわん泣き過ぎてたのもあるけど、よし子「とも美ね。あと岡田さん」

けん太「ここに座ってる方が、よっぽど効くわ。死んだんだなあ、親父」

よし子「死んだのよ」

けん太「なあ。匂いはしないけど、思い出すな。匂いがしないから思い出すのか。親父の幽霊がいるみたいだ」

よし子、黙ってお茶を出す。

よし子「じゃ、お父さんの分も入れて、四人分」

けん太「やめるよ、縁起でもない」

よし子「嘘よ、高梨さんも」

けん太「手続きは終わったからさ。今晚、開けよう」

よし子「何もう終わったの」

けん太「ああ。俺もさすがに明日の夜には戻らなきゃなんないし」

よし子「ありがとね、いろいろ。もーお母さん書類はダメ、文字ばっかで頭くらくらしち

やう。役場の書類も、挿し絵とか入ってればいいのにねえ」

けん太「邪魔だろ」

よし子「まち子さんも座りなさいな」

まち子「じゃあ、失礼して」と座りに行く。

けん太「とも美と後で話しくよ。例の遺言書以外にも、書類関係、何かゴチャゴチャいろいろあるけど、半分くらいは俺が持って帰ってやるから。心配しないで」

よし子「まち子さん」

まち子「はい」

よし子「そこ。お父さんの席だから」

まち子「あ。すみません、本当」

よし子「こっちでいい？」

まち子「はい」

よし子「いろいろありがとね、お手伝い。本当にねまち子さん、上司の方にきちんと事情話して、早めをやめた方がいいわよ仕事。三十代の男って言ったらね、一番期待もされるけど、一番報われない、でも一番大事な、つらい時期なんだから」

まち子「はい」

よし子「内助の功、これに勝る味方はないわ。本当、けん太も、一時はどうなることかと思ったけど、立派になって」

けん太「バカ、ちゃんとモノになるかどうかは、これから次第だよ」

よし子「お芝居を書くときって、登場人物になりきって書くの？」

けん太「まあ、やるときもあるよ」

よし子「でしょう。そうだと思った」

けん太「何だよ」

よし子「あんたは人の気持ちがわかる人だもの。そういう人でなきゃ、立派な本は書けないわ」

けん太「そんな、わかんないことだってあるよ」

よし子「あらそっ」

けん太「例えば、母さんとか」

よし子「え？」

けん太「つらいんだろ、ホントは。親父のこと。……よく頑張ってるよ」

よし子は、黙ってけん太の手を取り、じっと握る。はじめ、悲しそうな表情だが、やがてきつと顔を上げて、

よし子「ちゃんとお仕事してんの？ ペンだこが見つからないぞ」

けん太「キーボード」

よし子「あらごめん遊ばせ」

けん太「何なら一緒に、東京出てこいよ。思い出すだろ、ここじゃ」

よし子「そうね。それもいいわね。ってあんた」

けん太「何だよ」

よし子「そんなお金あるの。借金、返し終わったの。モビットとアコムと」

けん太「返したよ、するなよそんな話、今さら。さて」

よし子「まだどっか行くの」

けん太「いや、上でも美と話してくる。ちょっと落ち着かせないと」

よし子「これ」

けん太「何だよ」

よし子「どら焼き。持ってってやんなさー」

けん太「ああ」

よし子「晩ご飯、何食べたい。泊まるんでしょ、今晚」

けん太「簡単なもんでいいよ。疲れてるだろ」

よし子「あら、疲れてたって寝てなかったって、三度々々のご飯を作る、忘れたことあった、

お母さん？」

けん太「じゃ卵焼き」

よし子「ええ？ そんなんでいいの？ お肉あるよ、生協でちよつと取り過ぎちゃって」

けん太「いいよ。こいつ料理うまいけど、卵焼きだけ下手なんだよ」

よし子「ああ」

まち子「すみません」

けん太「久々に食べたいな、うちの。甘い奴」

よし子「そうよね。家によって、ねえ、味付けもぜんぜん違うもんね。じゃあとで教えた

げる、佐藤家の卵焼き」

まち子「ありがとうございます」

よし子「うちのはね、甘い。甘い、卵焼き。好きだったわね、けん太」

けん太「ああ。じゃ、上」

まち子「失礼します」

よし子「ありがとね。どら焼き」

けん太「ああ」

まち子「あ」

けん太「どした」

まち子「雨」

よし子「え」

けん太「何だよ、降ってきちゃったか」

まち子「ベランダ、何か干してましたっけ？」

よし子「ああ、高梨さんが」

まち子「じゃ、入れときます」

よし子「ありがとう」

けん太「じゃ」

とけん太・まち子は立ち去り、よし子一人が残る。

九場すなわち、茶番その3

よし子「疲れてたつて寝てなくなつて、三度々々のご飯を作る。忘れたことなんかなかっ

たわ。三十九年。三十九年」

茶ねこ「やめよ！ 雨！ やめつてば！」

黒ねこ「卵焼きも焼けないであの女、二十九だっけ？ どうやって生きてきたんだろな」

よし子「私ね、今朝、お味噌汁作らなかつたの。初めてよ、こんなの」

黒ねこ「あのブー太郎の家政夫も、早く追い出そうぜ。他人が作った味噌汁は、やつぱ舌に合わない」

よし子「でも私お味噌汁また作れるかしら。自分のために作るお味噌汁なんて、嫌だわ、

何か、モヤつとして、曖昧で。気持ち悪い。独り言みたいで、気持ち悪いわ、そんなお

味噌汁」

茶ねこ「あの二人が帰ってくればいいんだ」

よし子「誰」

茶ねこ「お兄ちゃんとお姉ちゃん。部屋なら余つてんだから」

よし子「そうねえ、ここからだつて、新宿まで電車で一時間ちよつとでしょう。通えない

距離じゃないものね」

黒ねこ「けん太はともかく、とも美は」

よし子「ダメね、あの子は頑固で。女の子らしい、んー、何て言うのかしら、柔らかさが
ない」

黒ねこ「つたくよ、フェミニストが日本をダメにしたんだ。男にフライパン持たせて哺乳

瓶持たせて、それで子どもが喜ぶと思うか？」

茶ねこ「ぼくお母さんの焼いた卵焼きが食べたい」

よし子「当たり前よ。自分のことしか考えないからそうなるの。お母さんあれいつも感動

しちゃうんだけど、幸せって字は、辛いって字とそっくりなのよね。私はずっと幸せでもいつも辛かった。なーんかぼんやり、書いてちゃうことあるのよ、買い物メモにね、辛い、って。卵、牛乳、ソーセージ、辛い。おかしいでしょ？ でもね。そんなときでも。辛い、って字を見る度に、家族の幸せを思ってきた」

よし子「当たり前よ」

茶ねこ「ずっと働き詰めだったんだものね」

よし子「当たり前よ」

高梨が顔を出して話し掛ける。

高梨「奥さま」

よし子「今は入って来ないで頂戴！」

高梨「はい。買い物に、行ってきます」

よし子「卵」

高梨「はい」

よし子「卵一パック、明治のおいしい牛乳と、あと丸大のあらびきソーセージこれマルエツだと二袋で三百四十八円で売ってるからマルエツに行きなさいマルエツに。お肉はあるから、あと適当に青いお野菜、ほうれん草でもキャベツでも何でもいいから」

高梨「はい」

よし子「何でも大丈夫よ、何でも。何とかしますから私が。覚えた？」

高梨「覚えました」

よし子「ならさっさと行く。お給料払ってるのよ」

高梨「傘、お借りしても」

よし子「私が断るとでも思ってるの？」

高梨「行って参ります」

高梨、立ち去る。

よし子「雨」

茶ねこ「雨が好きだなんて、ふしぎ」

よし子「子どもなのよ、どいつもこいつも。誰も私の気持ちなんかわかつちやくれない」

茶ねこ「男の人はいいよねえ、定年があつて。遊びたい放題」

黒ねこ「定年なんてのも甘つたれた制度だよ。人生はさあ、戦いだからさあ、戦いをさあ、

やめた時点で、生きてる価値ねーっつーか」

よし子「けん太がいけないのよ、歌舞伎だか演劇だか知らないけど、水商売に足突っ込んで」

黒ねこ「人生は浮きつ沈みつ。静かな人生こそ冒険。わかるぜ、マダム」

よし子「あの人は絶望したのね。バラバラになっていく家族に。自分勝手に続ける息子・

娘に。せつかく、お祖父さんの代から受け継いだ立派な事務所があつたのに」

黒ねこ「茶ねこ、あなたちよつと何言い出すの」

よし子「我が耳を疑ったわ」

黒ねこ「茶ねこ、あなたちよつと何言い出すの」

よし子「お生憎さま、耳が遠くなるほど老けちゃいません」

黒ねこ・茶ねこ「あなたちよつと何言い出すの」
よし子「卑怯者、一人だけ先に逃げ出そうとするなんて」

十場すなわち、ゆき男の我が侷

黒ねこ・茶ねこ「あなたちよつと何言い出すの」

ゆき男「二人分の年金で、月に二十五万くらい入るだろ。定期に今千二百万、普通預金で五百万あるだろ」

黒ねこ「どうするのこれから」

ゆき男「暮らしていけるだろ、十分」

黒ねこ「どうやって生きていくの」

ゆき男「どうやって、って、十分暮らしていけるだろ」

黒ねこ「どうやって生きていくの、って聞いているの、私は」

ゆき男「落ち着けよ。もうこれ以上、稼がなくなつたって」

茶ねこ「またそうやって人を馬鹿にして。私が何も考えられないお馬鹿さんだつて言いたいの？」

ゆき男「違つよ」

と、ゆき男、煙草を吸おうとするが、

黒ねこ「煙草やめて。うちじゃ吸わないって約束したでしょ」

ゆき男「ああ」

黒ねこ「懇意にして下さつてるお客様だつて、あるでしょう。中込さんとか、山下さん、後藤さん、それに」

ゆき男「岡田がな、わかるだろつ岡田、あいつが独立するって言うから」

茶ねこ「あげちゃうの、岡田さんに」

ゆき男「あげちゃうつて、お前」

茶ねこ「けん太のことはどうするの。どうせすぐダメになつて戻つて来るに決まつてるんだから。それまであなたが」

ゆき男「あいつとは約束しただろ」

茶ねこ「何が」

ゆき男「社会・世間に迷惑をかけないこと。経済的に自立すること。健康に」

黒ねこ「そんな、何年前の話？ やめてよね、もう少し現実的に考えてくれなきゃ」

ゆき男「あいつは、嘘はつかないよ。つくならきつと、いい嘘をつく」

黒ねこ「馬鹿馬鹿しい、きつととか多分とか言つてあなた、それで何度けつまづいたか、覚えてる？ あの子のこときちんと考えてるならね、あの子が帰ってくるまで、帰れる場所をちゃんと残しておいてあげなきゃ」

ゆき男、喋らない。煙草を吸おうとするが、やめる。

茶ねこ「事務所閉めて、どうするのこれから。サラリーマンと違って定年があるわけじゃなし。もう嫌になつちやつたの？」

ゆき男「二人分の年金で、月に二十五万くらい入るだろ。定期に今千二百万、普通預金で五百万あるだろ」

黒ねこ「お金の話はやめて。けん太、あの子はちゃらん村のぼらん太郎くん。炊飯器の使い方がわからないって電話してくるようなお馬鹿さん。とも美、あの子は人の気持ちかわからないぷりぷり屋さん。パソコンがお友達でお仕事で、友だちなんか一人もいない。二人とも今に音を上げて、私たちのところに帰って来るの」

ゆき男「二人とももう大人なんだ」

茶ねこ「私好きよ、今でもあなたのこと。うちの自慢のお父さん。マルエツの帰り道に事務所の前を通るとね、あなたの後ろ姿、背中を丸めて机に向かって、好きよ。大変だ。ど立派なお仕事」

ゆき男「大っ嫌いだよ、こんな仕事」

黒ねこ「そりやあ大変でしょうけど」

ゆき男「大っ嫌いなんだ、こんな仕事」

茶ねこ「私は好き」

ゆき男「世の中ぜんぶが数字に見える。……出先で入った喫茶店で、コーヒーなんか頼むだろ。店内を見渡すと、その店の数字がぜんぶわかる。座席数、内装、メニューの値段、立地、外装、対抗店舗の有無、バイトの時給、そこから予想される客単価、回転数、経営規模、売上、年収、そこから弾き出される所得税額、消費税額、個人事業税あるいは法人税額、店舗にかかる固定資産税額。コーヒーを運んできたのが店の奥さんだったりすると、あんまりかわいそうで、泣きたくなる」

茶ねこ「すごいじゃない」

ゆき男「お客に賢い領収書の切り方のコツなんか教えてると、あんまり虚しくて、泣きたくなる」

黒ねこ「しょうがないじゃない、お仕事なんだから」

ゆき男「支払義務が確定している未払費用を計上すれば、損金に算入されて節税できますよ。その有形固定資産なら減価償却方法に定率法を選べば、節税できますよ。小規模企業共済の掛け金は税法上、全額が課税所得から控除されるから、節税できますよ。含み損のあるゴルフ会員権を売却すると、損失が生じて節税できますよ」

黒ねこ「大変なお仕事だけど、それが人生じゃない」

ゆき男「こんなものは人生じゃない。もう疲れたよ。定年で、いいだろ。数字はもう、見たくない」

ゆき男、煙草を吸おうとする。

黒ねこ「煙草やめて。うちじゃ吸わないって約束したでしょ」

ゆき男「ああ」

黒ねこ「お茶、淹れてあげる。気分転換なら、お茶の方がいいのよ」

茶ねこ「何かね、スリランカのハーブティー、サマハンって言うんだけど、体がぼかぼかして、副交感神経のリラックスにいいんですって、とっても。お父さんにいいかって思って」

ゆき男「一本だけ、吸ってもいいか」

黒ねこ「うちじゃ吸わないって約束したでしょ」

ゆき男、しばらく止まっているが、煙草に火をつける。

黒ねこ「やめて」

ゆき男「一本だけ」

茶ねこ「私ダメだつて言ったでしょう煙草の匂い、あぁもう気持ち悪い」

ゆき男「試供品でもらったんだ。Dなんとか、つて言つて、匂いの少ない」

黒ねこ「どうして約束守ってくれないの？」

茶ねこ「ああ嫌だ。くっさい。くさいわ」

黒ねこ「今村さんちの奥さん肺がんで亡くなったのよ、奥さんは吸わないのに」

問。ゆき男は煙草を吸っている。

ゆき男「痔の具合が少しよくなつたら、山登りでもしてみたいんだ。それにもう一度、写真も始めたいな。カメラ持つて。杖突いて。もうすっかりおじいさんだ」

茶ねこ「あなたけん太のこと愛してないのね。私のことももう、愛してないんだ。自分さ

えよければいいんだ」

黒ねこ「カメラなんて、また子どもみたいなこと言い出して」

ゆき男「やめなけりゃよかったよ」

黒ねこ「やめてよかったのよ」

ゆき男「写真、やめてから、俺は別の人間になつちまつたんだ」

黒ねこ「写真をやめたから、あなたは今のあなたになれたのよ」

茶ねこ「私好きよ、今でもあなたのこと」

ゆき男「デジタル一眼レフつて今、すごいんだつてな。ま、俺にはわからんだろうから、

押入れからあの古いニコン引つ張り出してきて、フィルム買って」

黒ねこ「あれはもう捨てたじゃない」

ゆき男「捨ててない」

黒ねこ「捨てたわ」

ゆき男「捨ててない」

黒ねこ「捨てた」

ゆき男「捨ててない！」

問。

ゆき男「捨ててない！ 捨ててないよ！ 捨てたはずがない！ 捨てられるはずがないじ

やないか！」

黒ねこ「自分で捨てたのよ、あなた」

問。

茶ねこ「お茶、淹れましょうね。落ち着くよ」

ゆき男「ああ」

黒ねこ「煙草、やめて下さい」

ゆき男「悪かったよ」

黒ねこ「もうやめたら？」

ゆき男「もう、やめよう。もう吸わない。二度と吸わないよ。家でも、事務所でも、喫茶

店でも。やめよう」

茶ねこ「ホント？ 嬉しい」

ゆき男「ああ」

黒ねこ・茶ねこ「ありがと」

黒ねこ・茶ねこ、ゆき男に頬にキスをする。

茶ねこ「ねえ、あなた」

ゆき男「何だ」

茶ねこ「この年になってもまだ、おかしいでしょ、私あなたのこと大好きなの」

ゆき男「ああ」

黒ねこ「あなたは？」

ゆき男「ん？」

黒ねこ「あなたも私のこと、好き？」

ゆき男「好きだよ」

ねこたちはゆつくりとお茶を淹れる。

ゆき男「お前、猫でも飼ったらどうだ。好きだったろう」

茶ねこ「いいわよ、まだ」

ゆき男「俺が仕事行ってる間とか。退屈だろう」

黒ねこ「それは老後にとっておくの」

ゆき男「老後だろう、もう」

茶ねこ「いいえ、私はまだまだ現役ですよ。お母さんに定年はないの」

ゆき男「じゃいつ老後になるんだ」

黒ねこ「だから。ならないのよ。お母さんはね、死ぬまでずーっとお母さん、しんどいわ

あ。さ、どうぞ。スリランカの、ハーブティーでございますわよ」

ゆき男「ありがと」

十一場すなわち、茶番その4

茶ねこ「飲みなよ、おばちゃん」

よし子「え」

黒ねこ「せっかく淹れてあげたんだから」

よし子「お茶を淹れるのは私の仕事でしょう触らないで」

茶ねこ「触ってませーん、だって僕たち」

黒ねこ「ねこだから！」

茶ねこ「ねこですから！」

よし子、カップを持つが、やはり戻す。

よし子「あの人、お茶、大好きだった。食後、いつも飲んでた」

黒ねこ「リズム、習慣、規律。よりよい人生を手に入れるためのお手軽ライフハック！」

よし子「煙草なんかより私の淹れるお茶の方が、好きだった」

茶ねこ「当然さ、あんなのゲロとウンコとヘド口をミキサーにかけて飲むより気持ち悪い」

よし子「あの人は最後まで私を愛していた」

黒ねこ・茶ねこ「自殺という可能性もある、か」

よし子「あるわけないでしょ！」

間。

よし子「あらいけない、ぼうつとしちまって。郵便局行こうかしら。……嫌だ。電気料金

払ったつけ。……あれ、最後に美容院行ったのいつだったかしら。……ああ、そうだ！
洗剤！ 洗剤切れてたの！ よかった！ 洗剤、ジョイ、ジョイ、モイストケア！ こ
ないだ普通のジョイ買ったのね、売ってなくてモイストケア、そしたらもう手、荒れち
やっぺ。買わなきゃ、ジョイ。ジョイ、モイスト」

間。

よし子「あの人は最後まで、愛してたわよね私のこと」

茶ねこ「当たり前だよ」

黒ねこ「馬鹿なこと言うのはよし子さん！ なんつって！」

とても静かな間。 買い物袋を提げた高梨が戻って来る。

高梨「奥さま」

間。

高梨「あの、奥さま」

よし子「やめてって言ったでしょう」

高梨「えっと、じゃあ、……よっちゃん」

よし子「違うわ」

高梨「そっ、ですよね」

よし子「お母さん」

間。

よし子「高梨さん」

高梨「はい」

よし子「ここ拭いてくれない。お茶。こぼしちゃって」

高梨「……かしこまりました」

高梨、テーブルを拭く。よし子、それを見ている。やがてよし子、高梨の袖を掴む。

高梨は困惑する。よし子、高梨の袖を引っ張り、自分に近づける。そして腕にしがみつ
くように抱きつく。高梨、困惑している。よし子、立ち上がり、高梨の体に抱きつく。

高梨、少し我慢しているが、すぐに我慢できなくなり、振り払って叫ぶ。

高梨「やめる気持ちわりいなババア！ 頭おかしいんじゃないの診てもらえよ病院行っ
て精神病院！ おら（と、買い物袋をよし子に投げつけて）、卵。買ってきてやったぞ
二パック。ソーセージ、キャベツ、チンゲン菜！」

よし子「いくらだった」

高梨「いらねえよ」

高梨、立ち去る。よし子、買い物袋を拾い上げ、中身を確認する。

よし子「ダメね。卵、一番下に入れてる。ジョイ、買い忘れてるじゃないの」

黒ねこ「これだから素人は、専業主婦ナメンじゃねえぞ！」

茶ねこ「お買い物ひとつとっても、センスが問われるんだよね」

よし子「よかった。少し割れてないのあるわ。ソーセージ、キャベツ、チンゲン菜。チ
ンゲン菜は、けん太は好きなんだけども美がダメだから。なし。でもキャベツあるわね
キャベツ。お味噌汁。うちね、お味噌汁にキャベツとソーセージ入れるの、染谷さんに
言ったらナイナイ入れない珍しいわよそれって言われたけど、普通よね？」

黒ねこ「俺ちよっとお味噌汁はわかんねえな、ねこですから！」

茶ねこ「猫舌ですから！」

よし子「最近のねこは贅沢よね。昔はお味噌汁ぶっかけたご飯で事が足りたのに、カルカンの黒缶だのフリスキーだの」

黒ねこ「つけあがりやがって、イエネコ風情が！」

茶ねこ「のらねこはその点、たくましいんだ」

よし子「柴崎さんち猫飼ってるでしょう、一ヶ月でエサ代、一万円もかかるんですって信じられる？」

黒ねこ「バブルがいけなかったんだよ。バブルでみんな勘違いしてさ、贅沢することが幸せだって思い込んで、飽食の時代の夢から抜け出せずにいるのさ」

茶ねこ「ロンドンブーツ一号二号って、どっちが一号でどっちが二号だっけ」

よし子「亮くんの方が一応一号ってことになってるらしいわよ、年上だから」

茶ねこ「へえへえへえ！」

よし子「ただ幸せに、普通に生きていく。それが一番難しいの」

茶ねこ「幸せって何かしらね」

よし子「あんた、まだまだね」

黒ねこ「私これ幸せかしら、なんて考えてるつちは、幸せは掴めないのさ。のらで生きてくなら、覚えときな！」

茶ねこ「はい先生！」

十二場すなわち、父からの手紙

けん太「母さん」とけん太出て来る。

よし子「何」

けん太「何かあったの。高梨さんと」

よし子「もうそろそろお腹減った？」

けん太「だから、高梨さん」

よし子「卵。見て、割れちゃったの。洗剤、買い忘れてくるし。ダメね」

けん太「それで怒ったの」

よし子「まさか。そんな、滅多なことじゃ切れないわよお母さん、あんたじゃあるまいし」

けん太「ああ」

よし子「お母さんお腹減っちゃった。作ろうか、晩ご飯」

とも美とまち子も出て来る。

けん太「ああ、いや、その前に。開けちゃおうと思って」

よし子「いいわよお、まだ」

けん太「大事なことから」

よし子「あら。珍しい、母さん晩ご飯まだー、晩ご飯あと何分ー、俺腹減ったよ、晩ご飯

まだー、の、まだまだ大魔王が」

とも美「お母さん」

よし子「開けなくなっただけわかるわよ、何書いてあるかなんて！ 何年連れ添ったと思って

んの、三十九年よ三十九年！」

けん太「落ち着いて」

よし子「どうせ酷いこと書いてあるんでしょ！ みんな嫌いなのお母さんのこと。自分勝手、好き勝手、勝手なことばっかして、誰もあたしのことなんか考えてくれない」

けん太「母さん」

よし子「みんなそう、みんな自分が一番大変って思ってる。わがまま放題、好き放題。誰もね、誰も、嫌われたくっってお小言言ったりしませんよ、誰のため、あんたらのためでしょう、あんたらの」

けん太「母さん」

よし子「読まないで頂戴ね。あたし舌噛み切って死ぬから」

けん太「読むよ」

よし子「読まないで頂戴！」

よし子はしゃがみ込んでしまつた。

よし子「お味噌汁。お味噌汁飲むわよね、けん太。とも美」

けん太「遺言状。遺言者、佐藤ゆき男は」

よし子「キャベツとソーセージ、入れるでしょ？」

けん太「遺言者の有する下記の不動産を」

よし子「卵焼き、甘い、甘い」

けん太「下記の不動産を、妻・佐藤よし子に相続させる。記。……この家の住所と、地目、

地積、家屋番号、種類、構造、床面積が書いてあって」

よし子「けん太」

けん太「何」

よし子「何読んでるの、それ」

けん太「遺言状だよ」

よし子「誰の」

けん太「親父の」

けん太、封筒の中の二枚目、手紙らしきものを手に取り、読み出す。

けん太「この遺言は、職業病だ。今まで何人、相続問題の顧客を扱ってきたかわからない。私の愛する家族が、無用のトラブルに見舞われぬよう、用心のために書いておく手紙だ。だからもし、私が事務所に出ている間にこれを見つけたりしても、どうか慌てないでくれ。」

この手紙を最初に見つけるのは、きっとけん太かとも美だろう。二人はもう大人だ。私から言うことは何もない。人としてまっすぐ、人に対してやさしく、生きて下さい。幸運と、幸福を祈る。

よし子へ。感謝が尽きない。

ありがとう。今まで。

ありがとう。私を見つけてくれて。

ありがとう。私を選んでくれて。

ありがとう。私を支えてくれて。

ありがとう。私を励ましてくれて。

ありがとう。私を叱ってくれて。

ありがとう。私を自慢に思ってくれて。

ありがとう。毎日の食事を。

ありがとう。毎日の生活を。

ありがとう。毎朝の、あなた朝よ、もう起きて下さい、遅れますよ。今朝はパン、ご飯、おそば？　いつてらっしゃい、運転気をつけてね。毎夕の、お帰りなさい、ご飯できてますよ。今日はどうでした？　毎晩の、ちゃんとお風呂、入って下さいね。明日はいつも通り？　おやすみなさい。一日、一日を普通に生きていく、そんな簡単なことでさえ、私は一人でできなくなって、もう三十九年が経つ。でも私は満足だ。ごく普通の、ごくありきたりな、ごくごく幸せな人生だった。

ありがとう。これからも。けん太とも美を、よろしく頼む。きつとお前なら大丈夫だね。

同封した自筆証書と同内容の原本が、公正証書として公正役場に保管されている。公証人の言うことは税理士と同じくらいややこしいから、岡田に頼むか、本平先生に相談に行くといい。この手紙が開封されないことを、つまり、明日もまた、あの八釜しい妻の声に目覚める朝の来ることを、祈りつつ。平成二十二年十二月三日、遺言者、佐藤ゆき男。

終わりだよ。……母さん

間。

けん太「岡田さん、電話番号わかる？」

とも美「夕方に一度、電話した。明日来てくれるって。ちよつと遅くなるかもって言うだけ」

けん太「本平さんにも連絡した方がいいかな。告別式で少し俺、話したけど」

とも美「うん、それも岡田さんと会ってからで、いいんじゃないかな」

よし子「けん太。とも美」

けん太「ん？」

よし子「生姜焼きくらいしか作れないけど、食べる？　晩ご飯」

けん太「そうだな。食おうか。いや、どつと疲れたよ。とも美は？」

とも美「食べる」

けん太「あ、母さん、こいつの分も」

よし子「当たり前でしょう、今日一日、あ、いや、お通夜からずっと、ご迷惑おかけしちゃって」

まち子「いえ、そんな」

よし子「じゃ、ちよつと待ってて、すぐ」

けん太「あれ。卵焼きは？」

よし子「あるわよ。あるに、決まってるでしょう。さて。……あらやだ。ご飯、炊いてないかも」

けん太「じゃあ、いいよ。卵焼きだけでも」

よし子「了解しました」

と、よし子立ち去る。

十三場すなわち、兄と妹

とも美「ちよつと」

けん太「ん？」

とも美「どうやったの？」

けん太「勸進帳だよ」

とも美「何それ」

けん太「一般教養だろ、それくらい」

とも美「知らない」

けん太「白紙を読み上げるんだよ、書いてある振りして。弁慶と牛若丸の」

とも美、けん太の手から手紙を取り上げる。

とも美「ワープロじゃない」

けん太「ああ」

とも美「こんなことしてさ。良心が痛まないの？」

けん太「読ませられるかよ、あんなの」

問。

けん太「オチなんかなくていいんだよ。親父がさ、一生かけて打ってきた芝居だぜ。ごく普通の、ごくありきたりな、ごくごく幸せな人生。何も起きなかったけど、何もかもがあつた。愛と感謝。家族。いい幕引きだよ、実際」

とも美「私は反対したからね」

けん太「わかつてるよ」

とも美「何か問題起きたら、お兄ちゃんが」

けん太「じゃあお前、今すぐ行って本当のこと話してこいよ。それで気が済むんなら」

とも美「……」

けん太「俺だつて、気分よかないよ、こんなの。だつてあいつ、言ったんだぜ俺に、『母さんを悲しませないこと』、つて。なのに、自分から反故にしゃがつて。まあ、親父を責める気はないけど。でも、母さんを泣かせる気も、ないんだ」

とも美「それはそうだけど……。でも、よく封開けたね。公正証書なかったら、どうするつもりだったの」

けん太「あり得ないよ」

とも美「何で」

けん太「親父だから」

問。

けん太「なあ」

とも美「ん？」

けん太「本当はさ。どうしたらよかったと思つて」

とも美「手紙のこと？」

けん太「いや。それだけじゃなくて」

問。

とも美「私ちよつと、見てくる」

けん太「何で」

とも美「心配でしょ」

けん太「とも美」

とも美「何」

けん太「笑えよ。そんな顔で行くなよ」

とも美「……」

けん太「約束だぞ」

とも美、立ち去る。

十四場、すなわち妻

まち子「上出来。よく書いてたじゃない。これからもファミレスで書いたら？　なんて」

けん太「ああ」

まち子「実働約三時間で、原稿料何百万でしょ。いい仕事じゃない」

けん太「いや」

まち子「ん？」

けん太「一千万は、超えるんじゃないかな」

まち子「ならなおさら、いい仕事したじゃない」

けん太「金のためにやったんじゃない」

まち子「ならなおさら」

けん太「何だよ」

まち子「いい仕事したじゃない」

けん太「よく書いてただろ」

まち子「まあね」

けん太「わかるんだ。親父のことと、お袋のことなら」

まち子「でもちよっと、税理士が書いた文章にしちゃ、気取り過ぎかな」

問。

まち子「土地はしばらくお母さんのもんか。これね、後で相続するとなると結構引かれるし、毎年の固定資産税も馬鹿にならないから、早めにお金に崩して少しずつ贈与にする」といいよ。一年につき百十万までなら税金引かれないから」

けん太「後でいいだろ、そんな話」

まち子「ダメだよ、どうせいずれ揉めるんだから。ちゃんと妹さんと話してよ？　…

…私、さすがにもう仕事休めないから、明日の朝イチで帰るね。いるんでしょ、しばらくく？」

けん太「うん。ちよっと、母さんも心配だし」

まち子「自分でついた嘘なんだから、墓場まで持って来なさいよ」

けん太「嘘じゃないよ」

まち子「嘘でしょ」

けん太「丸つきり嘘だったら、いくらお袋だって信じないよ。本当だから本当で、嘘だから嘘なんて、そんな、簡単なもんじゃないんだ」

まち子「そうなの？」

けん太「そうだよ」

問。

けん太「目の見えないおばあさんと、貧しい女の子が出会うんだ」

まち子「何」

けん太「おばあさんは女の子を、見舞いに来てくれた自分の孫だと思い込むんだ。女の子はお腹が空いているから、おばあさんの孫として振る舞うんだ。二人はしばらく、幸せに暮らす」

まち子「おとぎ話？」

けん太「でもおばあさんは死んじゃうんだ。今際いまわの際で、女の子は悩むんだ。本当のことを、言うか。言わないか」

まち子「ダメに決まってるじゃない、言っちゃ」

けん太「でも、おばあさんは死ぬほど嬉しいんだよ、孫の手を握りながら死ぬことが。死ぬほど嬉しい。でもその子は」

まち子「孫じゃない」

けん太「でも、孫なんだよ」

まち子「なら、言わなけりゃいいでしょ」

けん太「でも」

まち子「悩むことなんかじゃない。そこでおばあさんの両手から孫ひっpegがして、誰が得するの？ そうでしょ？ お母さんだってそう。ちよっともう、スレスレだったじゃない、ここ数日。随分救われたんじゃないの、天国からのラブレターで。ナイスフィクション！」

けん太「フィクションじゃ、ない」

問。

まち子「じゃ、さつさとフィクションでお金稼げるように、頑張らなきゃ。家だつて子どもだって、欲しいんでしょ？ 初めてのギヤラが一千万なんて、幸しいじゃない」

けん太「まあね」

よし子「できたよー」

まち子「ほら来た。笑って、笑って」

十五場すなわち、家族の食卓

よし子、卵焼きを乗せた大皿と五枚の取り皿、菜箸を持ち、現れる。

よし子「はいはいはい、ごめんねー、今ご飯、炊いてるから」

けん太「おっ、いい匂いじゃない」

よし子「珍しいわね。ないの、今日は、『母さんまだー、まだまだー』」

けん太「腹べこだよ、もう。って、すげー量だな」

よし子「卵六個使っちゃった。てへ」

まち子「わ、おいしそ」

よし子「あ、そうだ、教えたげるんだった、作り方！」

まち子「あ！」

よし子「ごめんね、ごめんねー」

とも美現れる。箸立てと牛乳を持っている。

とも美「コップ持って来る？」

よし子「ああ、お願い」

けん太「俺いいよ、ティーカップで」

とも美「だめー」

まち子「私、行きます」

よし子「いいのよまち子さん、座ってて」

まち子「ちよっとはお手伝いしないと」

よし子「あらそーお」

まち子「はい」

まち子、立ち去る。

よし子「あらあらあら。いいお嫁さんだこと」

けん太「ホントね、俺にはもったいないよ」

とも美「お兄ちゃん牛乳、お茶？」

けん太「バカ牛乳に決まってるだろ卵焼きには」

とも美「別に決まってるじゃないでしょ」

よし子「ほら喧嘩しない！ はいはいはい」と皿を取り分ける。

けん太「いただきます」

よし子「バカッ、ちゃんと今取り分けてあげるから」

けん太「早くしろよ」

よし子「最初は、お父さん」

とよし子、お父さん席の皿に卵焼きを起き、その前に例の遺書を置く。そして固まってしまう。とも美、よし子から菜箸を受け取り、卵焼きを配りながら、

とも美「お母さん。座って」

よし子「何年ぶりかしらね、家族四人、揃ってここ座るのなんて。ちよっと前までは、毎

日こう、してたのにな。懐かしい」

けん太「冷めるぞ」

よし子「ごめんね、卵焼きだけで」

とも美「いいよ、後で生姜焼き焼くんじゃよ」

よし子「ごめんね、せつかくこうやって食べるのに、ローストビーフとかすき焼きとかじゃなくて。お寿司取るうか？」

けん太「いやいいよ、こういう、普通なのの方が」

よし子「そう？」

けん太「ああ」

とも美「うん」

よし子「そうね。そう。普通が一番。ただ幸せに、普通に生きていく。それが一番難しいの」

けん太「聴き飽きたよ、それもっ」

よし子「あれ」

とよし子、立ち上がり、周囲を見渡す。

とも美「どしたの」

よし子「どこ行ったのかしら」

けん太「ええ？ ……おい、もうボケたのかよ、まち子ならさっきコップ取りに」

よし子「あーいや。うん。何でもない。 ……食べましょうか」

とも美「まち子さん」

よし子「後でもつかい、頂きますしましよ。最初は家族四人で。やりたいのよ。ね、お父さん」

もちろん答えはない。

よし子「さて、じゃ」

と、見ると、けん太がもう一つ食っている。

とも美「ちょ、お兄ちゃん」

よし子「こらけん太！ ちゃんと頂きますしてから……」

けん太「うまい」

よし子「 ……うん」

黒ねこ・茶ねこ「ばいばい」

そして演劇が終わる。